

## メトロポリタン史学会 第七回秋季シンポジウムのお知らせ

第7回秋季シンポジウムを以下の通り開催いたしますので、お知らせいたします。今回のシンポジウムのテーマは「災害と歴史資料」です。日本史と考古学からの報告、そして同分野からのコメントをお願いしました。自然災害の発生が地域とその歴史研究において、実際にいかなる影響を及ぼしたのか、そしてそれをどう乗り越えるかについて、方向を探ってゆきたいと思えます。皆さんの参加をお待ちしております。

日時 2012年11月17日(土) 午後1時～午後5時  
会場 首都大学東京(旧東京都立大学)南大沢キャンパス 本部棟1階・大会議室  
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)

### テーマ「災害と歴史資料——現状と課題を考える——」

〔報告者〕

奥村弘氏(神戸大学 日本近代史)

「大震災と地域歴史遺産

——災害に強い豊かな地域歴史文化をめざして——」

本間宏氏(福島県歴史資料館 考古学)

「原子力災害と歴史資料」

コメント: 谷口央氏(首都大学東京 日本近世史)

山田昌久氏(首都大学東京 考古学)

※シンポジウム終了後には懇親会を行います。

## メトロポリタン史学会第8回総会・大会報告

2012年4月21日(土)、首都大学東京 本部棟・大会議室において第8回総会・大会が開催されました。大会の参加者は31名でした。

まず午前10時30分から小谷汪之氏を議長に選出して総会が始まり、2011年度活動報告、会計決算、監査結果、2012年度活動方針案、予算案、委員候補者が順次提案されました。2011年度は総会が半年延期されたため、委員会で承認された暫定方針・予算に基づいて活動が行われましたが、無事承認されました。

議論では1年間の活動を振り返り、研究活動、会員交流の企画、会誌発行や会運営等について活発に意見が提出されました。今後の活動に活かしていきたいと思います。

午後は大会シンポジウム「歴史におけるジェンダー—権力と女性—」を行いました。シンポジウムは、歴史をジェンダーの視点で読み解くことの意味を考えるものであり、中野委員の趣旨説明の後、次の四氏の報告が行われました。

高松百香氏（東京学芸大学非常勤講師）

「平安後期の政治文化とジェンダー — 女院を中心に —」

福田千鶴氏（九州産業大学）

「奥向研究の現状と課題」

長野ひろ子氏（中央大学）

「維新変革とジェンダー — 再構築をめぐる —」

姫岡とし子氏（東京大学）

「歴史研究とジェンダー — 近代ドイツのナショナリズムを例にして —」

いずれも通説やその枠組みに対する鋭い問題提起を含む意欲的な報告であり、全体討論では坂元ひろ子氏（一橋大学）のコメントを交えて活発な議論が行われ、また大会後の懇親会ではより率直に意見が交換されました。報告は2013年12月刊行予定の『メトロポリタン史学』第9号に特集論文として掲載される予定です。ご期待ください。

### メトロポリタン史学会第8回総会議案書（2012.4.21）

[メトロポリタン史学会 2011年度活動報告]

2011.4~2012.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第7号を2011年12月に刊行し、史学科のある大学を中心に約80機関に寄贈した。
2. 東日本大震災・福島第一原発事故の影響により、2011年4月23日（土）に予定していた第7回総会・大会を中止し、暫定方針・予算に基づいて活動することとした。
3. 大会シンポジウム「帝国とその遺産」の内容を一部改めたうえで、第7回総会・大会を2011年11月26日（土）に開催した（参加者22名）。
4. 第8回大会シンポジウム「歴史におけるジェンダー — 権力と女性 —」（2012年4月21日）の準備を行った。
5. 会報11号（2011.9.29）、12号（2012.3.30）を発行した。
6. 会員数は現状維持にとどまり、拡大目標（165名）を達成できなかった。

[メトロポリタン史学会 2012年度活動方針案]

2012.4~2013.3

1. 会誌『メトロポリタン史学』第8号を2012年12月に刊行する。
2. 第7回秋季シンポジウムを2012年11月17日（土）に行う。
3. 第6回秋季シンポジウム「古代東アジアの国家形成」、第7回大会シンポジウム「帝国とその遺産」の各

報告を会誌『メトロポリタン史学』8号に特集として掲載する。

4. 第6回大会シンポジウム「20世紀の戦争 — その世界史的位相 —」の報告集を有志舎より刊行する。
5. 第5回歴史探訪を2012年5月20日（日）に実施する。
6. 第9回総会・大会（2013年4月20日）の準備を行う。
7. 165名を目標に会員拡大に努め、会財政の確立を図る。
8. 必要に応じて委員の補充を行う。

[メトロポリタン史学会 2011・12年度委員名簿]

任期：2011.4～2013.3

会 長：佐々木隆爾

副 会 長：峰岸純夫，増谷英樹，小谷汪之

事 務 局：木村 誠（事務局長），谷口 央，赤羽目匡由，白川耕一，前田弘毅

編 集：河原 温（責任者），奥村 哲，佐々木真，澤田秀実，月脚達彦，福田千鶴，出穂雅実

企画・研究：中野隆生（責任者），小野 昭，角田三佳，川合 康，趙 景達，橋谷 弘，林田伸一

監 事：義江明子，山田昌久

メトロポリタン史学会 2011年度決算報告

2011.4～2012.3

[収入]

			2011予算	2011決算
前年度繰越金			25,955	25,955
会費			739,000	620,000
	2005年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	0
	2006年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	0
	2007年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	0
	2008年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	10,000
	2009年度	(現金)	—	0
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	40,000
	2010年度	(現金)	—	10,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	103,000
	2011年度	(現金)	—	25,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	407,000
	2012年度	(現金)	—	5,000
		(銀行)	—	0
		(郵便振替)	—	20,000
雑収入			22,000	0
	会誌売り上げ		—	0
	叢書売り上げ		22,000	0
	銀行口座利息		—	0
計			786,955	645,955

[支出]

		2011予算	2011決算
会誌制作費		500,000	406,875
郵便料金		99,600	64,576
	会誌発送	39,600	30,376
	大会案内・会報等発送	50,000	34,200
	葉書・切手	10,000	0
	その他	—	0
事務用品代		20,000	1,186
賃金・旅費		50,000	10,000
雑費		20,000	11,798
	振込手数料	—	420
	弁当・お茶・紙コップ	—	378
	懇親会赤字補填	—	11,000
予備費		97,355	0
次年度繰越金		—	151,520
	現金	—	88,347
	銀行	—	13,823
	郵便振替	—	49,350
計		786,955	645,955

●会員数 153名(一般142名 学生・院生11名)

●会費納入率 11年度・101/153=66.0% 10年度・121/154=78.6% 09年度・131/154=85.1% 08年度・129/149=86.6%

メトロポリタン史学会 2012年度予算

2012.4.1～2013.3.31

[収入] 912,520

前年度繰越金		151,520
会費		739,000
一般会員	5,000 × 120	600,000
学生・院生	3,000 × 12	36,000
未収分	5,000 × 20	100,000
	3,000 × 1	3,000
叢書販売	2,200 × 10	22,000
合計		912,520

\*予定会員数：165名（一般150，学生・院生15）

[支出] 912,520

会誌制作費		500,000
通信料金		99,600
会誌郵送	180 × 220	39,600
大会案内・会報等発送		50,000
葉書・切手		10,000
事務用品代		20,000
賃金・旅費		50,000
雑費		20,000
予備費		222,920
計		912,520

2012年5月20日(日), 第5回歴史探訪「江戸城の遺跡を訪ねて」を開催し, 18名の方が参加しました。

## 江戸城遺跡見学記

昭和43年史学科卒 菊地 実

卒業後は史学とは縁のない生活でしたが, 先日メトロポリタン史学会より江戸城遺跡見学会のご案内をいただきふと参加してみたくなり申し込みました。

私が30年間勤めていた農業団体が有楽町にあり皇居の堀や石垣は日常の見慣れた風景でしたがこれまで全く関心がなく, 「お堀の鯉は大きいな」くらいの感想でした。

当日, 集合場所の区立日比谷図書館に行くときすでに十数人が集まっていますが, 私と同世代の60台前後の人が大部分でした。中には小学校高学年くらいのお子さんを連れた中年の女性の方もいました。案内は千代田区の文化資源担当課主査の後藤宏樹さん, 気さくな方で堅苦しい話はあまりなくエピソード中心の案内で私のような素人でも楽しく見学できました。



案内はまず図書館内の江戸城関係展示からでしたが, 模型や写真などを多用した視覚に訴える展示が多く分かりやすく工夫されたものでした。続いて日比谷公園内を歩いて皇居に向かいましたが, 公園内にも石垣や庭園など江戸城関係の史跡が沢山あります。

江戸城見学は井伊大老襲撃で有名な桜田門から。後藤さんが「彦根藩邸は三宅坂のあのビルのあたりで桜田門のすぐ近くですよ」と指差す方向にビルがはっきり見えました。桜田門まで5~6分で救援隊が駆けつけられるような距離で, 暗殺が井伊側の油断を突いた一瞬の襲撃であったことが実感できました。続いて桜田門から広い皇居前広場を歩いて二重橋に向かいましたが, 広場は60年前の血のメーデーの現場, なにも記念碑はありませんがこれも昭和の史跡です。

二重橋見学後大手門から皇居の中に入りましたが, 築城当時は大手門前まで海であったとのこと。日比谷から東側は一面の浅瀬でありそこを埋め立て縦横に運河を巡らせて江戸が出来たのです。まさに東洋のベニスです。

大手門から本丸に向かう途中で, 出仕する諸大名は籠や馬を下りて徒歩で本丸に向かわねばならなかったとのこと。道の両側の石垣の石は一つが何十トもあるような巨大なもので, 大名にこの巨石を見せて威圧するためにわざと下馬させ歩かせたそうです。現在でも宗教団体などが宗派の威勢を示すために巨大な寺院や本部を作りますので幕府の狙いは私にもよく分かりました。

後藤さんは石垣に造詣が深く, 作った大名, 時代, 地形によ





り違う江戸城石垣の構造を熱心に説明してくれました。それによると広大な皇居を延々と囲む高い石垣は幕府が諸大名に持ち場を割り振って作らせたそうです。諸大名は泣き泣き作ったのでしょうか、幕府に睨まれたら即改易の恐怖からか競って立派なものを作っています。各大名は持ち場の石垣の石に名前を入れたとか、「ほらあその石に蜂須賀と書いた字がかすかに見えるでしょ」と後藤さんが指さす石垣になにやら字らしきものが見えました。

大阪城をも上回る規模と言われた本丸天守閣跡もみまし

たが、石垣だけの更地を見ると意外に小さく感じました。明暦の大火で焼け落ちた後再建しなかったそうですが、幕府創設からすでに数十年も経ち徳川幕府は盤石のものとなり、あえて巨大天守閣を再建して外様大名を威圧する必要もなくなったのでしょう。

本丸跡は広い公園となり、東京にもこんなに緑豊かで静かな空間があったのかと感動しましたが、あの大奥や忠臣蔵の松の廊下などを思わせるものはほとんどありませんでした。本丸の半分は大奥だったそうですが、広いといっても4～5千坪のところに数千人の女官がひしめいていたのかと思うと壮観です。

意外だったのは玉川上水が教科書に書かれているような江戸市民の飲料水を賄うのが主目的ではなく、本丸庭園の滝や池の水を供給するために作られたものだったということでした。

隋の煬帝が中国の南北を貫く巨大運河を作ったのは、経済目的でなく江南に舟遊びに行くためだった、という話に似ています。

後藤さんの名ガイドに聞きほれているうちに時の経つのも忘れ、見学が終わった時はすでに4時半を過ぎ、懇親会をする時間もなく現地解散となりましたが、歩きながらの立ち話では私と同世代で阿部闘争や学園紛争の激動の時代に学生生活を過ごした人も何人かおられ、その時代の思い出なども話し合ってみたかったとの思いは残りました。次回に期待します。案内の後藤さん、木村さんをはじめとする幹事の皆様ありがとうございました。



## 【歴史随想】

### モンゴル・サルヒット野外調査記（その5）

出穂雅実（首都大学東京，ユーラシア上部旧石器時代）

2009年5月23日午前7時頃、調査隊はウランバートルのモンゴル科学アカデミー考古学研究所をいよいよ出発した。サルヒット人類化石発見地点までの道のりはおよそ600km。まずはルートA0501でヘンティエー県の県都ウンドゥルハーンを目指す（第1図）。ウンドゥルハーンまでの道のりは約360kmである。調査隊の車両は2台。一台はロシア製トラックのカマス。もう一台はロシア製ジープのプルゴン。私たち研究者はプルゴンに乗り、同行スタッフと学生はトラックの座席と荷台に分乗した。

小一時間ほど走ると、巨大なチンギスハーン像があらわれる（写真1）。この像は高さ約40m、騎馬像としては世界最大の大きさを誇る。2008年に観光目的で建立された。像の中はチンギスハーンの偉大さを学ぶことができる博物館になっている。この像は展望台にもなっており、ウマの頭までは上ることができる。とにかく威容を誇る。

しばらくするとバヤン・ダヴァー峠にさしかかる。ウランバートルから東へ旅する時は、必ずこの峠で止まり、オポー（石や木を積んだ標柱）を時計回りに3周回って旅の安全を祈願する。オポーの周りを回る時は、辺りの地面から石を拾いオポーの上に積み上げる。石が周りにない時は、ウォッカの瓶でも何でも良い。とにかく何か積み上げる。そして運転手以外は、ウォッカで乾杯する。瓶が空になるまで「飲む」のが流儀だ。朝から運転手以外の全員が一気に酔っ払い、盛り上がる。

ウォッカで一気に盛り上がったあとは、車に戻って一気にグッタリ盛り下がる。朝から40度のアルコールを何杯も飲むのは体に良いとは思えない。しかしこれも慣れなのであろう。モンゴル人たちは平気な顔をしている。

山坂道が終わり、眼前に大きな河谷が拡がり、町が見えてきた。ヘルレン川流域の炭鉱の町、バガノールである。河谷沿いには、巨大なズリ山（選鉱後の廃石の山）が数kmにわたって続いている。小さな島国に住む日本人にとって、モンゴルの景色は大抵のものが信じがたいほど広く大きい。このズリ山も信じがたい規模である。バガノール炭鉱は1978年に、当時のモンゴル政府とソ連政府との合意に基づき設立されたバガノール炭鉱会社が採掘している。露天掘りの炭鉱で、鉱石品位はさほど高くないようであるが、ウランバートルの火力発電所などで用いられているという。30年以上続く採掘によってできたズリ山は威容を誇る。

バガノールの町を通過し、検問所で通行税を支払い、ヘルレン川を渡る。数年前から行っていた橋の架け替え工事が完了していた。いつ来ても工事はほとんど進んでいる気配が無かったのだが、ついに古い橋の下流側に新しい橋が架かっていた。ちなみに日本では、工事作業員の詰所はプレハブであるが、モンゴルでは当然、ゲルである。



写真1（上）大モンゴル建国800周年記念事業で建立されたチンギスハーン像、（中）オポーと呼ばれる峠の石積み、（下）バガノール市のカントリーサイン。

ウランバートル市街を抜けるとすぐに草原が広がる。チンギスハーン像はとにかく巨大で、見る者は皆、開いた口がふさがらない。

ヘルレン川を渡ると、また起伏の多い道が始まる。辺りの山体は、南向き斜面は草原で、北斜面にはダフリヤ・カラマツとシラカンバが生えている。日射量の少ない北斜面でだけ樹木が生育できるのであろう。この地域は、ヘンティー山地と呼ばれ、バイカルリフト系の山地・山脈の南端を構成している。景色は南シベリアとほとんど変わらない。

バガノールから 100km ほどで次の町であるジャルガルトハーンに着く。町の家屋のほとんどは、豊富な森林資源に囲まれているため、ゲルではなく木材を使っている。

このジャルガルトハーンでは、30 分ほど休憩した。道沿いに西部劇に出てくるような建物やバラックが建ち並んでいる。喉が渴いたので、ビタフィットというペットボトル入りのジュースを飲む。

ジャルガルトハーンを出発してしばらくすると、山がちであった景色はまた広々とした草原の景色に変わり始めた。道沿いに大小の湖が点在し、ウマ、ヒツジ、ラクダ、そしてタンチョウヅルなどの野鳥の群れが水浴びをしている。

午後 2 時頃、ウランバートルを出発して 7 時間後、ようやくウンドゥルハーン市に到着した。ウンドゥルハーン市は、ヘンティー県の県庁所在地であり、人口は約 1 万 5 千人である。市街中心部はとても賑わっている。私たちは、モンゴル人研究者たちに付き従って一件のレストランに入った。ゴリヤシと呼ばれる定食を全員が注文した。ゴリヤシは、一つのプレートの上に、ライス、ヒツジ肉炒め、キャベツとニンジンのサラダ（ロシアとモンゴルではビタミンサラダと呼ばれる）が盛られている。なかなか美味しい。

レストランを出て、30 分ほど県庁前の広場でくつろいだ。モンゴルの美しいクリアブルーの空を仰ぎ見た。気温は 20 度前後で長袖を着ていないと肌寒く感じるが、直射日光を浴びると、あまりの光の強さに夏の暑さのような錯覚を起こす。レストランの前に建っているチベット仏教の寺でマニ車をゴロゴロ回した。

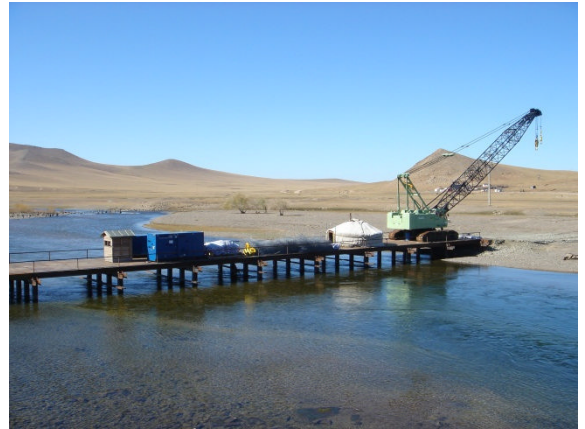


写真 2 (上) ヘルレン川に架かる建設中の橋。(中) 明るいタイガが拡がり始める北斜面、(下) ジャルガルトハーンの木造家屋。

上は 2006 年段階の橋架工事の状況。この状況から数年間変化がなかった。下はブリヤート族とよく似た木造の家屋。



午後3時にウンドゥルハーンを出発した。ここからは道を北東にとり、ルートA19で80kmほど先のバットノロブ村を目指す。ここからはすべて未舗装道路である。ところで、モンゴルの「砂利道」をそのまま砂利道と書かずに未舗装道路と書くには理由がある。モンゴルのたいていの「砂利道」は、日本のように意図的に砂利を敷いた道ではないからである。もちろんモンゴルにも砂利を轆いた道もあるが、ほとんどの道は草原を車が何度も通っているうちに轍ができ、それがだんだんと「成長」して道路になってゆくのである。道沿いに側溝が掘ってある未舗装道路も少ないので、もし車が道から外れても事故にはならない(事が多い)。草原に降りるだけである。ただし追い越しをするときなどは、意図的に道を降りて草原に乗り、猛スピードで走る恐怖を味わうことになる。

道が良くないために予想よりも遅れて午後6時頃にバットノロブ村に入る。以後はルートA19を離れ牧民の情報を頼りに進んだ。大きな問題は無かったが、荷物満載のトラックではゆっくり進むしかなかった。

午後7時を過ぎ、日の傾きが大きくなり影が長くなってきた。目的地のサルヒットまではまだ直線距離で50km以上ある。日没は午後8時半頃だということで、明るいうちに目的地に到着することは不可能となった。日没後に先を急ぐのは、相当の悪路であることと、鉱山周辺には日没後に「ニンジャ」が出現することなどを牧民から聞いていたので、リスクがあまりに大きいと判断し、風の弱そうな地形を選んで野営をすることにした。

モンゴル人以外の調査隊員は、すでに体がガタガタで、疲労困憊の状態であった。エンジンを止めるとあたりに静寂が訪れた。草原に体を横たえると体はまだ揺れているような錯覚をおぼえた。無風で、むせかえるような草の香りをあらためて満喫した。

日没まであと一時間を切ったところで、急いで野営の準備に入る。私を含むモンゴル人以外の調査隊員は、各自テントを設営した。モンゴル人たちはテントを設営しなかった。研究員たちは車両の座席で、学生たちは全員トラックの荷台に雑魚寝することにした。



写真3 (上) ウンドゥルハーン市の様子, (中) レストラン向いのチベット仏教寺院, (下) ルートA19の未舗装道路。

ウンドゥルハーン市内の幹線道路でも、アスファルト舗装化が進んでいる。過去に行われた道路工事はアスファルトではなくコンクリートである。

コックが大急ぎで人数分のサラミ入りサンドウィッチをこしらえてくれた。サンドウィッチを温かい紅茶で流し込んでいると、いよいよ暗くなり始めた。青空が広がっていたが、彼方南の空に黒い雲が点のように見えた。

あたりに夜の帳が降り、星が瞬き始めた。星空を眺めながら翌日の予定などを簡単に打ち合わせたあと、午後9時、各自テントに戻ることにした。彼方南の空に見えた黒い雲が、点から線になっていた。ヘルレン川に沿って雲が湧いているのであろう。

しばらくテントの中で日記をつけていると、一陣の風が吹いた。すぐに二陣目三陣目の風が吹いた。不思議に思い、テントから出て夜空を見上げると、南側半分の空には星が消えていた。南の空、遙か彼方に見えた黒い雲がすぐ傍まで迫ってきたことを知り、恐怖をおぼえた。

その後すぐに荒れ狂ったような嵐になった。強風がテントを地面から引き剥がそうとする。雨が雹に変わり、テントを叩きつける。何もできずにテントの中でじっと嵐が過ぎるのを待っていると、隣のテントから悲鳴が聞こえた。2人用テントを1人で使っていたフランス人女性のフラビアのテントが飛ばされた。地面に打ち付けたペグがすべて外れ、つぶれたテントに巻かれてフラビアは蓑虫のようになっていた。私たちは嵐の中でフラビアをテントから引きずり出し、飛ばされたテントを回収した。フラビアは他のフランス人達のテントに避難した。

その後、嵐は文字通りピタリとおさまり、まるでウソのような静けさが戻った。星は何事も無かったかのように瞬いている。フラビアはいま味わった嵐への恐怖から自分のテントを再度設置することを諦め、かくまってもらった4人用のテントで夜を明かすことにした。

フィールド第一日目が終わった。

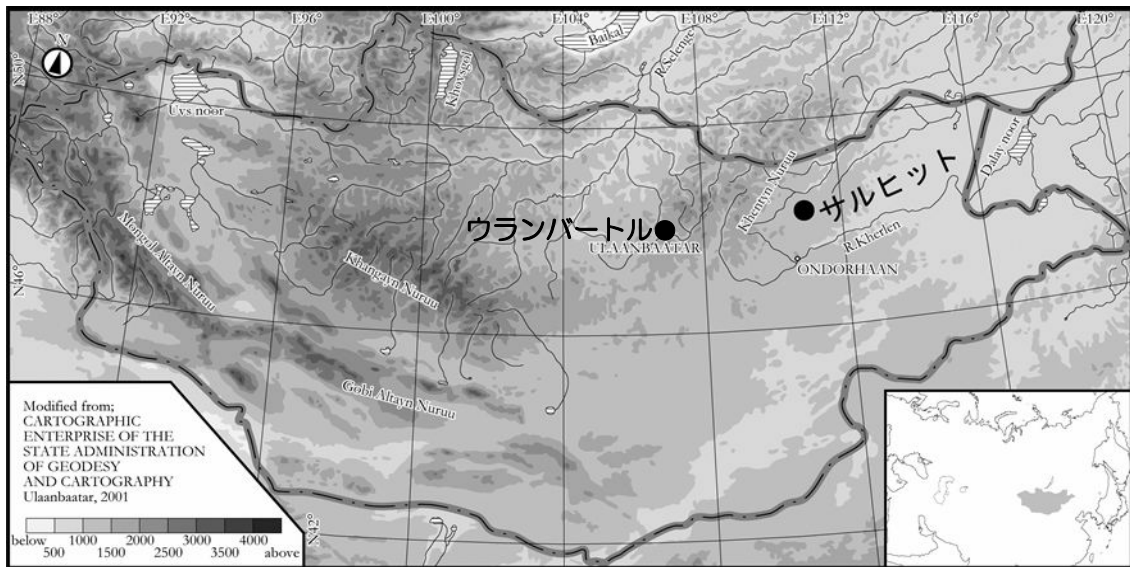
(つづく)



写真4 (上) 道を尋ねた牧民の夫婦、(中、下) 道半ばでの野営の準備。

上はサルヒットまでの道の状況を知らせてもらったバイクに跨がる牧民の夫婦。妻は赤子を抱えている。夫はおそらくカザフ族と思われる顔立ち。

下の写真の一番手前がフラビアのテントで、左が著者のテント。



第1図 モンゴル・サルヒット人類化石発見地点の位置。ロシア・ザバイカル地方の国境までわずか百数十キロメートルの地点にある。周辺の景観は広大なステップである。

### 【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

## 『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
  - ①論文(図表を含み、24,000字以内;英文の場合は、8,000語以内)
  - ②研究ノート・史料紹介(同 12,000字以内;英文の場合は4,000語以内)
  - ③学界動向(8,000字以内;英文の場合は2,700語以内)
  - ④時評・提言(4,000字以内)
- (5) 論文、研究ノート(縦書き、横書きいずれも可)には、欧文で要旨(300語以内)を添付する(原文が英文の場合は日本語要旨800字以内)。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿(表、図表を含む)3部、フロッピーディスク及び別記送り状\*(1部)を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース(歴史・考古学分野)、河原 研究室気付

『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119(河原研究室) Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawahara@tmu.ac.jp(河原温研究室内) SNC47077@nifty.com(河原温)

\* 送り状は学会ホームページ(<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>)からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にお問い合わせください。

### 【事務局からのお願い】

●第7回秋季シンポジウムのご案内をいたします。奮ってのご参加ください。また併せて引き続き会財政健全化のため、年会費を年度内にお支払い下さいますようお願いいたします。一般5,000円、学生・院生3,000円です。

メトロポリタン史学会(会長 佐々木隆爾)

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL: 0426-77-2110(木村誠研究室) E-mail: mshigaku@tmu.ac.jp

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会